

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381263

研究課題名(和文) クラスルームヒストリー法による学級リサーチメソッドの開発と実践的応用

研究課題名(英文) Developing "Classroom History" as an Alternative Research Method of Classroom Activities and Practical Application

研究代表者

白松 賢 (SHIRAMATSU, Satoshi)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：10299331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、クラスルームヒストリーを調査方法及び実践方法として開発し、日本の小学校における効果を例証することである。成果を測定するため、デジタルエスノグラフィーを、小学校3年生2クラス、小学校5年生1クラス、小学校6年生2クラスで実施した。その結果、次の2点が明らかになった。(1)ナラティブコミュニティとして学級を開発することで、児童による自治的な問題解決と文化創造をより促進することができる。(2)クラスルームヒストリーというメソッドにより、学級における集団的なリフレクションを促進し、学級のアイデンティティを確立することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop "classroom history" as an alternative research and practice method, and to demonstrate its effect on classroom management in Japanese elementary schools. Digital ethnography was employed for one year to clarify the process of classroom development in the lessons of Tokkatsu (Special Activities) curriculum. The data were obtained from two classrooms of third graders, one classroom of fifth-graders and two classrooms of sixth-graders in which the method of classroom history was used. The major findings are as follows: (1) developing classroom as a narrative community had facilitative effects on autonomous problem solving and culture creation by pupils; and (2) the method of classroom history promoted group reflection on classroom and established the classroom identity.

研究分野：教科教育学(特別活動)

キーワード：特別活動 クラスルームヒストリー 学級 ナラティブコミュニティ デジタルエスノグラフィー

1. 研究開始当初の背景

小学校における学級生活の向上は、近年の教育問題の解決に向けた喫緊の課題である。例えば、学級生活の問題に関して、1990年代の後半、小学校における「学級がうまく機能しない状況（いわゆる学級崩壊）」の社会問題化は記憶に新しい。それ以外にも、「いじめ」「不登校」「小一プロブレム」「逸脱行為」等の教育問題は、生徒指導の課題を示すとともに、その基盤となる学級生活の問題とも深く関わっている。すなわち、カリキュラムにおいて、学級活動（特別活動）は学級生活の向上への大きな役割を期待されており、その研究は改めて重要性を増している。

本研究では、特別活動において「話し合い活動が十分ではない」という問題を実践的関心の出発点とした。例えば、近年、「子ども熟議」（文部科学省）が推奨されている背景には、学級活動を中心とする特別活動において、「話し合い活動」が十分に機能を果たしていないことを指摘できる。確かに学級での「問題解決」や「文化創造」を通じた「クラスルームアイデンティティ」の構成過程が学級における「話し合い活動」の充実と深く関わっているという感受概念仮説がある。しかしながらクラスルームアイデンティティの研究について実践やリサーチメソッドの開発は不十分な状況にあった。

2. 研究の目的

本研究は、クラスルームヒストリー法による学級づくりのリサーチメソッドを新たに開発し、小学校の学級づくりを対象とした調査分析から、その有効性と実践への応用可能性を明らかにする。そこで第一は教師研究で用いられているライフヒストリー法を参考として、クラスルームヒストリー法というリサーチメソッドを開発する。第二はクラスルームヒストリー法を用いた調査分析から、クラスルームアイデンティティの構成過程を明らかにする。第三は学級生活の向上におけるクラスルームヒストリー法の効果を明らかにする。

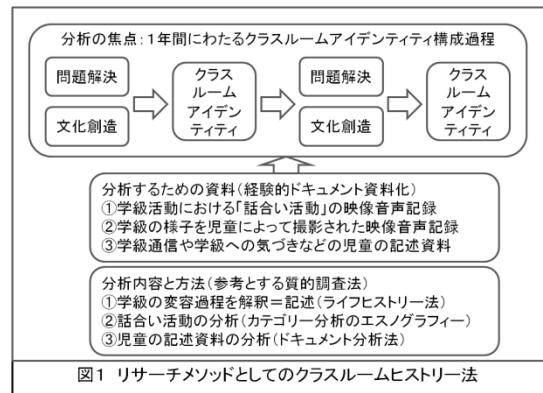
3. 研究の方法

まず研究方法をサブテーマに照らし合わせて説明する。

第一は、クラスルームヒストリー法というリサーチメソッドの開発である。ここでは、日本の特別活動の展開に関する研究資料と、海外におけるナラティブ研究の先行研究を収集し、リサーチメソッドの意義・方法を明確化した。

サブテーマ第二・第三のクラスルームヒストリーの分析及び実践的応用に関しては、小学校中学年2クラス、高学年3クラス分のデジタルエスノグラフィ（対象調査には、他

に3クラスの調査を行ったが、ドキュメント資料の分析可能性から5クラスを調査分析対象とした）を行い、クラスルームアイデンティティの構成過程（図1）及び実践的応用可能性を検討した。



4. 研究成果

(1)クラスルームヒストリー法の意義と開発 学級経営史から捉える意義

まずクラスルームヒストリー法の必要性を明らかにするためには、学級経営に関する先行研究の整理が必要である。「学級経営」の概念を考察すると、大きく二つに大別できる(下村・天笠・成田 1994、志村 1994、岡東 1998、蓮尾・安藤 2013)。一つが「条件整備」型学級経営観であり、今ひとつが「学級づくり」型学級経営観である。

もともと欧米の学級経営概念では、授業を効率的に運営する上で、授業を成立させる条件整備としての学級経営(Classroom Management)の考え方が着目されるようになった。そのため、「アメリカから導入されたスクール・アドミニストレーションの一環としてのクラスルームマネジメントは、『学習活動の規律を構築し、維持し、学習を阻害する要因を取り除く』教師の『手段 means』を意味していた」(岡東 1998)。このことを示すように、欧米のクラスルームマネジメントのテキストにおいて学級経営という概念は、根本において、授業を効率化する条件整備を基盤として構成されている(例えば、Banes 2006、Wong and Wong 2014)。もちろん、それらの実践や研究の蓄積過程で、教師主導の単なるストラテジーとしての条件整備ではなく、教師と児童生徒の信頼関係を基盤とする方法やスキルが強調されるようになってきている(とりわけ、Wong and Wong 2009・2014)。しかしながら欧米の場合、教師の仕事の多くは授業を中心としており、これらの学級経営観は授業をよりよくするための方法論であり、主眼は教師の授業システムづくり、すなわち授業のための条件整備にある。

ところが日本の特色には「領域」と呼ばれてきた「特別活動」「道徳」を教育課程に包含しており、これは、戦後、全人教育の志向性を一貫して保持してきたことを意味する。

このため、我が国では、教科外活動における「学級経営」を重要な特質としてきた歴史と伝統がある(宮田 1954)。これらの教科外活動を包含した「学級経営」は生徒の自治的経営をも含んでおり、「学級づくり」(宮坂 1964)と表現されてきた。すなわちこの「学級づくり」型学級経営概念は、「条件整備」型学級経営よりも広範な領域を含んでいる。例えば、戦後の学級経営概念をまとめた下村・天笠・成田 1994 は、学級の経営技術の体系を、(1) 子供の行動を観察し解釈する経営技術、(2) 学級生活を設計する経営技術、(3) 学習環境を整備する経営技術、(4) コミュニケーションを図る経営技術、(5) 問題を解決する経営技術の5つとしている。ここでは条件整備型学級経営は(3)学習環境を整備する経営技術の一つに位置づけられており、それよりも広範な領域を学級経営の概念がカバーしていることを示している。このことは、我が国で「条件整備」型学級経営観と「学級づくり」型学級経営観の二つが戦後、伝統的に学校に根付いてきたことを示している。

他方、「条件整備」型学級経営観と「学級づくり」型学級経営観の二つの流れは、「学級経営」史のみではなく、「教授中心の授業」から「学習中心の授業」へと変革されていく流れとも深く関わっている。我が国において明治期の早い段階で「学級経営」が紹介されながらも、その概念が浸透しなかった理由に、当初には教授活動が最重要視され、多級編成による近代学校体系の成立(明治40年代頃)に従い、「学級経営」が着目されてきたという指摘がある(宮田 1954、37頁)。この「学級経営」への注目が高まる時期に、新教育運動と連動してきたことは「学級経営」史にとって極めて重要である。というのも、19世紀末から20世紀における授業の歴史は、知識伝達型授業・定型型授業から1世紀かけて行われてきた授業改造の試みの歴史であった(稲垣 2000、91-102頁)。そのため、19世紀末から20世紀初頭の「学級」を一つの教育単位とする制度化の過程において、児童生徒を学級経営の参画者と捉える視点が用意されてきた。例えば、沢柳政太郎は「学級」を教授(授業・学習指導)のみのために存在するのではなく、「訓育」上の効果に言及しており、澤正は「自治」の重要性を指摘しており、その後の新教育運動においても「自治的学級」としての在り方が目指されてきたという(志村 1994)。また、これらに加え、野村芳兵衛「児童の村小学校」における協働自治、「生活綴方」教育における生活指導(学校・学級文化の創造)等が、教科外活動の源流を構成してきた(田中・鶴田・橋本・藤村 2012、244-247頁)。

これらの教育思潮は戦後の学級経営観の構成に重要な役割を果たしてきた。宮坂 1964 は、雑誌「教材研究」や月刊雑誌「学級経営」等によって「学級経営」という用語の汎化した昭和24年~25年を、学級経営概念が戦後

日本でも用いられ始めた重要な時期と位置づけている。その位置づけにおいて、これらの雑誌や書物における共通の特色として、「一つはそれらが新教育のなかでの学級経営論であることであり、二つには、そこに戦前からの日本の現場における学級経営の実践の流れが反映していることである」(宮坂 1964、15頁)と指摘している。この結果、「条件整備」型学級経営よりも広範な「学級づくり」型学級経営として、拡張された概念が我が国に定着してきたことになる。

先行研究の検討から端的に整理するならば、「条件整備」型学級経営とは、教室における学習を整える条件整備を主たる目的とする観念であり、「学級づくり」型学級経営とは、「自治」という用語で示されるように、児童の参画を包含した概念である。この児童の自治を中核に据えた「学級づくり」型学級経営は、教科外活動の教育課程化(特別活動や道徳)により、我が国の一つの概念的特色を表象している。

そこで、上記の差異を踏まえて学級経営及び学級活動を領域別(必然的領域、計画的領域:条件整備型学級経営領域、偶発的領域:学級づくり型学級経営領域)に再構成し、偶発的領域をクラスルームヒストリー法の対象に設定し、実践に寄与しうる可能性を理論的に検討した。

クラスルームヒストリー法の開発

偶発的領域(学級づくり型学級経営領域)という日本のカリキュラムや学級経営の独自性を鑑みた場合、「ナラティブコミュニティ(物語として学級を形づくる共同体)」を考察する理論枠組が必要である。

そこで、Goodson(2001・2007・2008)のライフヒストリー法、Clandinin(2007)のナラティブインカー、van Manen(1997)の生きられた経験論など、ナラティブ(語りや言説)に着眼したカリキュラム研究を参考に、図2に示すクラスルームヒストリー法を開発した。

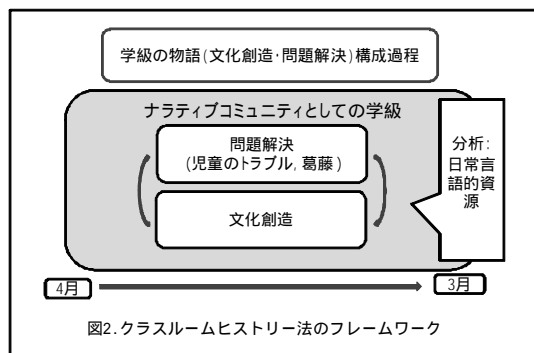


図2. クラスルームヒストリー法のフレームワーク

図2に示したように、クラスルームヒストリー法は、ライフヒストリー、ナラティブインカー、生きられた経験論を理論的なフレームワークとする。そして、1年間にわたる学級での問題解決や文化創造に関する話合い活動に着目し、どのような日常言語的資源(学級文化資源)が用いられ、どのような解

積実践として学級のアイデンティティや物語を構成しているかを調査 = 記録し、解釈 = 記述する。

(2) クラスルームヒストリー法による分析

本研究では表1に示した5つの学級におけるレコーディング記録を中心に分析を行った。まずClassAとBは、3年生の学級である。ClassCは5年生、ClassDとEは6年生の学級である。

なお比較分析としては、AとBの中学年の比較、CとDの高学年の比較を行い、Eのクラスはクラスルームヒストリーの実践応用対象クラスである。

表1. 調査対象及び調査方法

調査年度	学年学級数	児童数
2010-11	小学校3年生1学級 (Class A)	30 to 40
2013-14	小学校3年生1学級 (Class B)	20 to 30
2012-13	小学校5年生1学級(Class C)	30 to 40
2013-14	小学校6年生1学級(Class D)	30 to 40
201X-1Y	小学校6年生1学級(Class E)	10 to 20

中学年の比較分析

ClassAでは、係活動を中心とした学級文化創造を中心とし、ClassBでは、学校行事と関連づけた学級文化創造を中心として学級のアイデンティティが構成されていった。問題解決に関する話し合い活動は、係活動や行事に関わった学級の問題を題材として、常に学級目標を再構成しながら、話し合い活動が行われた。日常言語的資源には「学級」という用語が用いられながらも、「学級」に関する生活世界上の意味の再構成がクラスルームヒストリーを通じて達成されていた。

表2 学級の物語構築プロセス(中学年比較)

当初の問題	
A	<ul style="list-style-type: none"> 発達障害のある子どもへの否定的なラベリング 一人の女子が孤立しがち 男子と女子が分離したグループ 当番活動と係活動の未整理
	<p>学級の物語構築方法</p> <p>係活動 (グループ活動)</p> <p>様々なグループで、学級の生活をよりよくしようとすボランティア活動の組織化</p> <p>ここで生じるトラブル解決を話し合い活動で実施</p>
B	<p>当初の問題</p> <ul style="list-style-type: none"> 落ち着きのない子どもと他の児童の人間関係のトラブル 学級としてのまとまりに欠ける 男子と女子が分離したグループ
	<p>学級の物語構築方法</p> <p>学校行事と関連させて、学級をまとめていく「話し合い活動」を重視。</p> <p>(例)「なわとび大会」</p> <p>ここで生じるトラブル解決を話し合い活動で実施</p>

高学年の比較分析

またClassCとClassDのクラスルームヒストリーの自由記述から、エピソード分析を行った結果が表3である。この表3に示されるように、「話し合い活動」による学級の再構成が100.0%(ClassC)と79.5%(ClassD)の

表3. クラスルームヒストリーのエピソード分析 (自由記述分析)

2012-13: 何が学級を成長させたか? (Class C)	回答数	%
話し合い活動を通じて、学級目標を再構成したこと	39	100.0%
6年生を送る会を自分たちで考え、実行したこと	16	41.0%
運動会で学級がまとまった経験	14	35.9%
環境保全・美化活動	7	17.9%
2013-14: 何が学級を成長させたか? (Class D)	回答数	%
学級 (笑いあえる・注意しあえる・助け合える)の雰囲気	39	100.0%
問題解決や文化創造のための話し合い活動	31	79.5%
運動会で学級がまとまった経験	22	56.4%
係活動の経験と自信	16	41.0%

*Some responses were classified into multiple categories

回答率となっていた。小学校5 - 6年の学級の思い出には、集団宿泊行事や修学旅行、運動会といった学校行事が通常よくならぶが、学級の文化創造と問題解決をループとするクラスルームヒストリーの編成から、「話し合い活動」やそれによって構成される学級風土が高い回答率となっていた。

次の図3・4は、学級の話し合い活動における頻出ワード分析 (nvivo10) である。図3はClassDの6月に行われた「学級の問題と目標づくり」の話し合い活動で使用された日常言語的資源である。

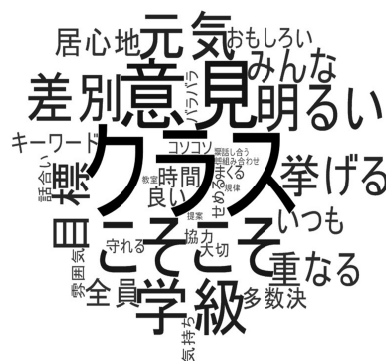


図3 2013年6月頻出ワード



図4 2014年2月頻出ワード

この図3と図4は同じClassDにおける話し合い活動のテキストデータを分析したものであるが、発話者、言語資源ともに増大し、学級についての解釈資源が増加していることがわかる。すなわち、「学級」とは子どもの生きられた経験と教師の生きられた経験が「話し合い活動」を通じて再構成され、一つの共通経験となっていく「ナラティブコミュニティ」であり、クラスルームヒストリー法によるナラティブ分析の重要性が示される。

(3) 実践的応用

以下のドキュメント資料は、クラスルームヒストリー法を実践として適用したClassEに関するフィールドノートである(年度は調

査学級の匿名性を高めるために明記しない)。本学級では、写真や映像を用いた学級の省察を行い、学級に関して子どもたちの意味づけを一人一人に語らせるクラスルームヒストリー法を実践した。

このドキュメントには「自発的」「自治的」という日本の学級経営概念の特質が示されており、教師と児童生徒もともに迷いながら、葛藤しながら、「学級」を再文脈化して対話的に構築するプロセスを生み出している。

小学校高学年の学級で、これまで学級で人間関係上のトラブルのあった子どもたちを担当することになった吉本先生(仮名)は、「今年一年だけでもこの学級で過ごしてよかった」と思える学級をつくりたいと臨んだ。(中略)

係活動やお互いの認めあいを言語化する活動、いくつかの学校行事を通して徐々に学級の雰囲気がよくなっていると個人面談でも子どもたちが答えるようになっていた。その矢先、11月に入り、学級で盗難事件が起こる。(中略)。12月から1月にかけて、学級の違和感に対して話し合いを提案したところ、いくつかの小グループで話し合いをしたいという児童からの提案に従った。それぞれのグループでの話し合いの時間を分け、教師の立ち会いのもと、話し合いが行われた。その結果、一つのグループでは、これまでの学年で起こった人間関係の問題が話し合われた。この集団では、「ハブられる怖さから、誰かに迎合していないといけない」という圧力を感じていたことを、子どもたちの言葉で話し合ったという。そして、「寂しかった」「何でも話し合える友達が欲しかった」といった発言を通して、実は、子ども同士がお互いに同じような気持ちをもっていたことを語りあったという。(中略)。一方、他のグループでも、「孤立している子がいることに気づきながらも、どうしていいかわからなかった」ため、「働きかける学級になろう」という提案が生まれた。これらのグループの話し合い活動から、学級での話し合いを経て「居場所」としての学級の在り方が模索されたという。

3学期末に行った学級のふり返りでは、「12月から1月にかけて行った話し合い以降の休み時間」を大切な思い出として回答する児童が多かった。その声では、個々の児童が様々な「居心地」を学級に見出し、お互いの場を尊重したり、共有できたりしたことを印象として語ったという。

(2014年4月吉本先生の学級報告から構成)

ここでは「居場所」という言語的資源が活用されているが、それは「友だち」「仲間」といった人間関係ではなく、むしろそれぞれにとっての「居場所」が多角的に学級に存在していることを確認するものであった。この意味では、常に学級(及び学校生活)の再文脈化は、学級や学校の「多元的なモラル・コミュニティ」を形成する契機であり、その中で、教師と児童生徒がどのような言語的資源を持ち寄って何を構成するか、という社会的相互作用とナラティブの研究を要請する。そ

の上で、写真や映像データを用いて行うクラスルームヒストリーはその社会的相互作用とナラティブの再編成を活性化することを明らかにした。

(4)成果のまとめと課題

本研究では、教室は「不安と危険に満ち満ちた格闘場(アリーナ)」(Goodson 訳書 2001、34頁)であることを強調する。そのため、教師も「主体」の一人として「交換不可能」であり、変化に富む存在であることを強調しながら、「個別性と全体性」をふまえて実践のストーリーが記述される必要がある。クラスルームヒストリー法により、学校の教員や実践者とテキストを共有する方法と可能性が確認されたが、研究世界のテキストと現場のテキストをつなぐ上では、クリニカル(冷静)にかつ教育臨床として活用しうる記述の在り方を、さらに検討する必要がある。

<引用及び主要参考文献>

Banes Rob 2006 *Primary Classroom Management*, SAGE Publications Ltd.

Clandinin, D. J. (2007). *Handbook of Narrative Inquiry: Mapping a Methodology*, Sage Publications.

Goodson F. Ivor (著) 藤井泰・山田浩之 (編訳)2001 『教師のライフヒストリー』、晃洋書房

Goodson F. Ivor and Pat Sikes (著) 高井良健一・山田浩之・藤井泰・白松賢(訳) 2006 『ライフヒストリーの教育学』、昭和堂。

Goodson, F. I. (2008). *Investigating the Teacher's Life and Work*, Sense Publishers.

蓮尾直美・安藤知子編 2013 『学級の社会学 - これからの組織経営のために - 』、ナカニシヤ出版。

稲垣忠彦 2000 『教室からの教育改革』、評論社。

宮坂哲史 1964 『学級経営入門』、明治図書。

宮田文夫 1954 『学級経営』、金子書房。

宮田文夫 1970 『学級経営(新訂版)』、金子書房。

岡東壽隆 1998 「学校経営と学級経営の連続性と統合性に関する理論的実証的研究」

(平成8年度～平成10年度科学研究費補助金(基盤研究C・2)研究成果報告書)
下村哲夫・天笠茂・成田國英 1994 『学級経営の基礎・基本(学級経営実践講座1)』、ぎょうせい。

田中耕治・鶴田清司・橋本美保・藤村宜之 2012 『新しい時代の教育方法』、有斐閣アルマ。

van Manen, M. (1990). *Researching lived experience: human science for an action sensitive pedagogy*. The Athlone Press
Wong K. Harry and Wong T. Rosemary 2009 *The First Days of School: How to Be an Effective Teacher*, 4th. ed, Harry K. Wong Publication, Inc.

Wong K. Harry and Wong T. Rosemary 2014 *The Classroom Management Book*, Harry K. Wong Publication, Inc.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

SHIRAMATSU Satoshi (2016), A Case Study of Developing “Classroom History” for Creative Classroom Management in Japanese Elementary Schools, *Bulletin of The Center for Education and Educational Research The Faculty of Education Ehime University*, 34, (in Printing). (査読無)

白松賢 (2015) 『『自発的』『自治的』の行方 - 特別活動にみる子ども中心主義のパラドクス - 』、『子ども社会研究』、21、61-74頁。(査読有)

白松賢 (2015) 「子どもの多様化とグループ化：その対策(特集 小学三・四年生の学級生活)」、『児童心理』、69(9)、24-29頁。(査読無)

白松賢 (2015) 「社会の変化に対応した新しい学級経営」、『体育科教育』、2015年4月号、10-14頁。(査読無)

白松賢 (2015) 「学級活動の話合いが、学級生活にいかされない(特集 小学五・六年生の学級生活)」、『児童心理』、69(3)、102-105頁。(査読無)

白松賢 (2014) 「授業/学級づくりに関す

る教育方法学的研究(1) - 教育課程にみる『学級経営』概念の日本の特色に着目して - 』、『愛媛大学教育学部紀要』、61、71-78頁。(査読無)

[学会発表](計6件)

白松賢 「クラスルームヒストリー法を活用した学級づくり - 話合い活動とリフレクションの活性化に向けて - 」日本特別活動学会第24回大会(関西学院大学:兵庫県西宮市) 2015年8月23日。

SHIRAMATSU Satoshi, “Classroom History” as a Clinical Research Method for Creative Classroom Management, 第21届臺灣教育社會學論壇(台湾:南投縣) 2015年5月28日(招待)。

SHIRAMATSU Satoshi and YAMADA HIROYUKI, Digital Classroom History for Building a Narrative Community: Opens Up Potential for Autonomous Classroom Management in Japanese Elementary Schools, *Society for Information Technology & Teacher Education International Conference(USA:Las Vegas)* 2015年3月2日。

SHIRAMATSU Satoshi, Developing Classroom History for Creative Classroom Management in Japanese Elementary Schools, *Hawaii International Conference on Education 2015(USA: Hawaii)* 2015年1月5日

白松賢 「社会の変化に対応した学級活動の創造 - 教育研究の立場からみる学級活動の創造 - (課題研究第2分科会:学会による発表依頼)」、『日本特別活動学会第23回大会(福岡教育大学:福岡県宗像市) 2014年8月24日。

白松賢 「学級リサーチメソッドの開発と実践的応用(1) - クラスルームヒストリーによる理論的考察 - 』、『日本特別活動学会第22回大会(鎌倉女子大学:神奈川県鎌倉市) 2013年8月18日。

[その他]

白松賢 「学校文化創造と日本の学級経営 - 日本の小学校の事例から - 』、『瀋陽大学師範学院(招待講演:中華人民共和国:瀋陽) 2015年9月23日。

6. 研究組織

(1)研究代表者

白松 賢 (SHIRAMATSU, Satoshi)
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号:(10299331)